

ヴァリテ (Varité)

精神分析における真理 (vérité) のバリエーション (variations)

「私はつねに真理を語ります。しかし真理すべてではありません。なぜならすべてを言うことはできないからです。真理をすべて言うこと、それは物質的に不可能です。語が足りません。この不可能によってこそ、真理は現実界に起因しています」
ジャック・ラカン 『テレビジョン』

NLS 第 24 回大会は、精神分析における真理のバリエーションを問うつもりです。分析において暴露が連続するままに生じる、真理のバリエーションを、ラカンはヴァリテ Varité という造語で圧縮して現しました¹。彼は多様なものとしての真理の次元に自ら開かれなければならないだろうと述べ、分析主体が言うことは真理ではなくサントームのヴァリテ (vari (é) té) であると付け加えています。教育活動全般を通して、ラカンは真理への参照を決して放棄しませんでした。彼は最初、真理を単数の定冠詞つき (La) の真理として扱いましたが、のちに複数の、多様な、嘘つきの真理として扱いました。しかしながら、常に存在していたものがあります。それは一方に真理、あるいは真理の諸効果。他方に言語とパロールの構造、さらには「言語のブイヨン²」の構造。この両者の連結が、常に存在していました。

真理、正確性、暴露

最初、ラカンは表現や媒介の次元とはべつのパロールの次元を強調します。それが暴露 *révélation* (新発見) の次元です。暴露とは、隠され、覆われていると想定されるひとつの真理の暴露のことで、見る時 (*l'instant de voir*) と同時に起きるものです。このようにして真理は暴露から逃避、逃亡に進み、その一方、分析はそれぞれの主体に個別的な一連の諸暴露として定義されます。創設的テキスト「精神分析におけるパロールと言語の領野の機能³」の中で、ラカンは満ちたパロールと空のパロールを対置します。満ちたパロールは主体の真理が実現されるものです。この展望においては、暴露からくる真理はパロールにおける真理に関わっています。「そこでは我々は真でも偽でもないものの現実にもぶつかる⁴」。現実とはここで正確性への参照からは区別され、ひとつの客観的現実へのいかなる一致にも還

¹ Lacan J., « L'insu que sait de l'une-bévue s'aile à mourre », leçon du 19 avril 1977, inédit.

² *Ibid*

³ Lacan J., « Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse », *Écrits*, Paris, Seuil, 1966.

J・ラカン『精神分析における話と言語活動の機能と領野』新宮一成訳、2015、弘文堂。

⁴ *Ibid.*, p. 256.

[同 32 頁]

元されません。ひとつのパロールの真理は、語の、物への適合に、立脚していません。フロイト自身、長い探求の果てに、諸トラウマの客観的現実を信じることを最後にあきらめました。無意識においては、その客観的現実「情動が備給されたフィクションと区別されない⁵」からでした。ジャック＝アラン・ミレールは以下のように定式化するでしょう。分析において問題となるのは、「それが何であるかを言うことではなく」、「そうあったことから真理を作ることが問題なのです。そして真理を作るのに欠けていたものがあります。それはトラウマのことで、穴を穿ったもののことです・・・そこで列に加わることができなかったものに対してディスクールをやって来させることが重要なのです⁶」と。

しかしながらしばしばラカンはフロイトの新たな発見を、主体のディスクールに侵入するものへのまなざしにより位置づけます。「誤り、誤認、さらには否定の次元において、通常それは発達します⁷」。取り違え、言い間違い、失策行為、つまりくものから真理は生じ、「背後のひとつの真理」、べつの意味を露わにします。真理が出現するのは、主体の語りの流れを中断し流れを超える、つまりきのモードによってです。「真理は、取り違えにおける誤りを襟首で捕まえる⁸」。それが意味しているのは、主体は自ら言うことを知らないのだ、主体はつねに言おうとすること以上のことを言っていて、つねに言うことができる以上のことを言っているということです。

真理、抑圧、歴史＝話

ジャック＝アラン・ミレールが「享楽との新しいひとつの同盟⁹」のテキストのなかではっきり述べているように、ラカンにとり分析とは、まず主体にとって単数の定冠詞 (*La*) 付きの真理の進歩、つまりひとつの歴史＝話 (*histoire*) の連続性において書き込まれると想定されたもののことでした。歴史＝話という用語、ラカンが「パロールと言語の機能と領野」の中で参照しているものとしてのそれは、無意識の用語に対応しています。「無意識は、ある空白によって刻み込まれるかある嘘によって占領された私の歴史＝話のあの章のことである。つまりそれは検閲された章のことである¹⁰」。分析においては、この歴史＝話を再構成することが重要です。抑圧を方法的に取り除くこと、覆いを取り除くことによって、その時その連続性を回復し、隠された真理を再発見できるようになります。ヒステリー患者たちと

⁵ Freud S., *Lettres à Wilhelm Fliess, 1887-1904*, Paris, PUF, 1956, lettre 69 du 21 septembre 1897, p. 191.

⁶ Miller J.-A., « L'orientation lacanienne. Choses de finesse en psychanalyse », enseignement prononcé dans le cadre du département de psychanalyse de l'université Paris 8, cours du 18 mars 2009, inédit.

⁷ Lacan J., *Le Séminaire, livre I, Les Écrits techniques de Freud*, texte édité par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1997, p. 291.

J. ラカン『フロイトの技法論[下]』笠原嘉他訳、岩波書店、1991 年、171 頁。

⁸ *Ibid.*, p. 292.

[同 171 頁]

⁹ Cf. Miller J.-A., « Une nouvelle alliance avec la jouissance », *La Cause du désir*, no 92, avril 2016.

¹⁰ Lacan J., « Fonction et champ... », *op. cit.*, p. 259.

J・ラカン『精神分析における話と言語活動の機能と領野』新宮一成訳、弘文堂、2015 年、37 頁。

の経験のおかげで、フロイトは生物的な記憶と想起とを混同しないように導かれていました。想起とは、主体の再構成された歴史に関わるものです。それは事後性においての、出来事の再主体化とその再構造化を含みます。そういう理由でラカンはまず精神分析を、主体によるその歴史＝話の引き受けとして定義しました。その歴史＝話とは、ひとりの他者に向けられたパロールにより構成されたもののことです。

ドラの症例について、ラカンはのちに「真理の発達」という表現を喚起するでしょう。それは「弁証法的転覆¹¹」に、したがって分析の進歩に関与するものです。抑圧と真理はこのとき反義語です。「抑圧の概念は暴露の経験により呼ばれ、要請され、召喚されます¹²」。しかしフロイトへの回帰において、ラカンはその発見の切れ味のよい鋤の刃をとりわけ再インストールするつもりです。それは事実の真実性からは離れているものです。「フロイトのもの」においてラカンは主張します。フロイトの本質的発見は「それが語る、そしておそらく人がもっとも期待しないところで、それは苦しむ¹³」と主張することにある、と。「私、真理である私は語ります¹⁴」。この主張は結局のところひとつの言表行為に属するものであり、普遍的ドクサに対する個人的なひとつの確信を主張する自我の言表（文）に属していないことを、ここで強調しておきましょう。

真理と知

ラカンは真理と知を対置することから始め、知に対する真理の優位を強調しました。とりわけメノンのパラドクスへの参照は、「エピステーメ、形式的一貫性により結ばれた知は、人間の経験すべての領野をカバーしていない¹⁵」ことを支持するのに役に立つでしょう。*Alèthès doxa*、真のオピニオンについて、ラカンは「そこには結ばれたひとつの知において把握されえないひとつの真があります¹⁶」と注意を払っています。メノンとソクラテスのあの対話において、作動中の弁証法的手順にならい、真理の創造的で忽然と現れる次元—そのなかで私たちは働いておりますが—をラカンは強調していました。それは、すでに構成された知の次元ではありません。

転覆

ラカンは真理と知のこの対置を維持しないでしょう。分析的ディスクールのマテームにおいて定式化するそのふたつの連結が現れるのを見るには、彼の「エコールの精神分析家についての提案」を待たな

¹¹ Lacan J., « Intervention sur le transfert », *Écrits*, op. cit., p. 219 & 216.

¹² Miller J.-A., « La vérité fait couple avec le sens », *La Cause du désir*, no 92, op. cit, p. 87.

¹³ Lacan J., « La chose freudienne », *Écrits*, op. cit., p. 413.

¹⁴ *Ibid.*, p. 409.

¹⁵ Lacan J., *Le Séminaire*, livre II, *Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1978, p. 26.

J.ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我[上]』小出 浩之他訳、岩波書店、1998年、23頁

¹⁶ *Ibid.*

[同 24 頁]

ければなりません。真理と知とは、ふたつのクラスにそれぞれ割り振られるがままになるのではありません。「生まれる時、真理として表象されるものは、登記され配置されながら知となる¹⁷⁾」。パスの提案は無意識的真理についてのひとつの知のこの展望において、記載されます。真理はまず、知でないもの *non-savoir* のように現れます。真理は自由連想によって姿を現し、ひとつの知の形式をとって終わります。「そのひとつも失敗しないという条件で、（それは）あまりに厳格な文字の連鎖として分節化される。知られていないもの *non-su* が知の枠組みのように秩序立てられる¹⁸⁾」とラカンは述べています。同様にラカンは、知という用語で、分析の終わりに起こる、欲望の存在から知の存在への変容を定めています。ここで注意を引くのは、私は語ると言う真理 *vérité qui dit je parle* の問題はもはやここにはなくて、「意味作用と鎖でつながれた、意味作用が空になった真理、そのせいで情熱さえも空になった真理¹⁹⁾」が問題になっていることです。分析的装置とは、ですから真理の価値をもつシニフィアン、主体にとり重要であったシニフィアンを収集することにあります。この装置はそれらのシニフィアンを孤立させるための分析家の行為を含んでいます。

しかし、最後にラカンは現実界の取り扱いについて、知を価値下げするに至るでしょう。アンコールのセミナーで彼は「ララングについての知の苦肉の策」という語を喚起します。言語の構造はその時フィクションに連れ戻され、同時に無意識は「ララングとうまくやるひとつの術」²⁰⁾として把握されます。ではいったい真理はどうなったのでしょうか？ 暴露についてはどう考えたらよいのでしょうか？

嘘つきの真理とフィクション

暴露の諸効果というものはある地点まで分析行程の道案内をするものです。真理はパロールにおいて産みだされることを諸効果は示しています。真理はフィクションの構造をもつとラカンは支持したのはそのためでした。フィクションという語はまぼろしや偽りのなにもものも表象しないと、ラカンは大雑把に説明していました。神話そして幼児の性理論のフィクションの性格はそのことを証明しています。物語の語りの構造が実際、死、実存と非実存、つまり言われえぬものの次元に属するもののような主題を扱うことを可能にしています。同様に、それは分析経験の本質的な次元を打ち立てています。しかしながら分析は真理がもはや通用しない領域まで推し進められることがあります。つまり享楽。暴露を伴う語りの岩盤の地点です。享楽について本当のことを言ったり真理全体について言ったりすることは人には不可能です。この点について、ラカンは言葉と＜もの＞の透明性という考えに逆行することをやめなかったことに人は気づきます。ひとつの全体のような真理を把握するという考えについても同じでした。その結果、分析のディスクールによってインストールされたパロールは、フィクションの次元、嘘つきの真理の次元に属することになります。言語はサンブラン（見せかけ）であり、現実界のまなざし

¹⁷⁾ Miller J.-A., « Le paradoxe d'un savoir sur la vérité », *La Cause freudienne*, no 76, décembre 2010, p. 124.

¹⁸⁾ Lacan J., « Proposition du 9 octobre 1967 sur le psychanalyste de l'École », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 249.

¹⁹⁾ Miller J.-A., « Le paradoxe d'un savoir sur la vérité », *op. cit.*, p. 129.

²⁰⁾ Lacan J., *Le Séminaire*, livre XX, *Encore*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1975, p. 127.

J・ラカン『アンコール』、藤田博史他訳、講談社選書メチエ、2019、250 頁。

からは、言語は嘘をつくことしかできません。フロイトはすでにエマの症例において最初の嘘 *proton pseudos* の機能を取り上げていました。嘘をつくことはですから嘘をつかないものと嘘のあいだの対立にはかかわらないものなのです。

最初のセミナーの時、ラカンはずでにパロールは嘘つきの真理の次元において展開されることを強調していました。真理とは嘘である、なぜなら人が出来事に与える語り、構築、意味に真理は依存しているからだ、と。「セミナー 11 巻英国版への前書き」のテキストの参照は一そこでラカンは嘘つきの真理という語を喚起していますが、ジャック＝アラン・ミレールがすでにそう私たちに誘ったように、「機能と領野」論文と同時に読まれ得るのです。ラカンはそこで真理がもはや嘘をつくこと、享樂とその満足以外のやり方では通用しない、ある別の領域に言及します。嘘つきの真理はその時現実界についての知の苦肉の策となりますが、だからといって真理の諸効果が産みだされ分析家がそれに注意を払うことを妨げはしません。「精神分析、それは真を作るものですが、真を作るということはどう理解すべきでしょうか？それは意味の一撃であり、ひとつの空白的な意味です²¹」とラカンは述べています²²。

真理、不連続とバリエーション

ラカンにとり、真理とは、ですから語りを伴わないでは立ち行きません。この語りは、言われることができなかったか、言われることが難しかったことに意味を与えながら、主体の歴史＝話の連続性を復元するものです。語りは「主体の現実において穴としてとどまるものの荷を負います。それはトラウマ、消し去ることのできない諸イメージ、歴史的なそのシーン、それらから意味を作り出すためです²³」。ひとりの他者に向かってひとつの歴史＝話を語りながら、複数の穴のあいだにひとつの連続性を確立することが重要なのです。しかしその連続性において復元されたひとつの歴史＝話という理想に対して、ひとつの不連続性の歴史＝話という概念をラカンはしまいに置き換えることになります。それは散り散りになって、輝きや、出現、暴露の端くれから作られる不連続性です。語りの不連続性は、唯一で一義的な真理という考えを問い直すものです。「分析的ディスクリールの分節化自体が分析主体を導くのは以下のものです。嘘つきの真理の網目、多様で変化する真理の網目、嘘のなかで絶えず揺れ動く真理、一過性のものでしかない真理、これらを構成し、織るように導きます。そして過去の偶然性と日常的な偶然性から出発してこの網目を織りなすことへと導くのです²⁴」。

こうして分析においては、暴露の発見が続いて起こりますが、時折それは以前の暴露をあらたに問い直すものとなるのです。その上、区切りや句切ることによって、分析家の行為は真理のバリエーションにかかわります。無意識が意味をもち、この意味が多様に再解釈されることをやめないのはこのようなことによるのです。歴史＝話 *hystoire* がその後転移的な次元でひとりの他者にとって構成される歴史＝

²¹ Lacan J., « L'insu que sait... », op. cit., leçon du 10 mai 77.

²² (原文記載なし)

²³ Miller J.-A., « La vérité fait couple avec le sens », op. cit., p. 88.

²⁴ Miller J.-A., « L'orientation lacanienne. Choses de finesse en psychanalyse », op. cit., cours du 11 février 2009.

話として把握される一方で、真理は多様化し、複数化します。理想的な連続性はありません、転移的で特異的な歴史＝話があるのです。

確かなことは、真理、真理のバリエーションは精神分析の関心事であり続けるということです。ポスト真理の時代で、それは周囲のディスクールには逆行しています。周囲のディスクールにおいて真理への参照は、パロールの価値下げやその墮落でさえあることと一緒に、もしくは付随したものとして、消え去ったのです。私たちの大会に賭けられているのは、主体と真理、パロール、分析可能性の条件自体との関連における、倫理的次元を主張することなのでしょう。「真理の試験とは、分析です。そこで人は真を言うように努め、その相棒である分析家は本当のことを言うというある種の情熱をあなたに吹き込むためにそこに存在します²⁵」。

²⁵ Miller J.-A., « La passe bis », La Cause freudienne, no 66, juin 2007, p. 211.